

ソラ↑↓シタ

松谷 将太

三十五年前、八月三十一日。

世界は三つにわけられた。

薄っぺらい会社の教科書の半ばぐらいに書かれたその言葉を少し眺め、僕は本を閉じた。

ふと窓の向こうを見る。

そこには輝く丸いものと、白くもこもこしているものと、一面の青があった。

それは太陽と雲と空と呼ぶものだけれど、

僕は、そんなものを見たことがない。

僕は、太陽(ニセモノ)と雲(ニセモノ)と空(ニセモノ)しか、見たことがない。

昔……といっても僕が生まれる少し前の話だけれど、この星は人の住める場所じゃなくなったらしい。何故そうなってしまったかは、詳しくはわからない。前に父親に訊いてみたら、先人達のツケがまわってきたのだと、苦笑交じり聞かされた。まあ、愉快な話ではないのは、それでなんとなく理解した。

そして、星に住めなくなった人類は逃げ場

所を求めることになる。それが宇宙と、今僕がいる地底だ。だから、ここから見えている空は本物ではなく、天井に投影された偽物でしかない。本物を知らない僕としては、あまり生産性のないことだと思っただけだ。

宇宙、地上、地底。

これを総じて、三千世界トライアングルと呼ぶ。

——僕が生まれる、少し前の話だ。

「あ」

「お」

飲み物でも買いに行こうと家を出たら、隣の家からも人が出てきた。というか、ぶっちゃけ知り合い。さらに言えば、幼なじみ。

「やっほ、お出かけ？」

「ああ……まあそんなところ」

「そっか、じゃあ一緒するね」

あつという間だった。返事をする間もなく、

彼女は歩いていってしまふ。既に決定事項らしい。

いや、僕としては断る理由はないのだけれど、勝手に決め付けてしまうのは、昔からの悪い癖だと思う。

「ほらー、おいてくよー。」

「はいはい。てゆうか、まだ居たんだね」

追いつきながら、そう声をかけた。しかし僕がどこに行くかも知らないのに先に歩きだすのはどうなんだ。いや、方向はあつてるんだけどさ。

「ん？そりや居るよ。私の家だもん」

「や、そうじゃなくてさ。確か、今日だったでしょ」

「ああ……うん、今日だよ」

少し、声に影がかかった。僕はそれに気付かないフリをする。

今日、世界はわかれた日である八月三十一日。

彼女は、宇宙へと移り住む。

「あと一時間ぐらいで出発。だから、最後にちよつとこの辺見て回ろうかなって」

「なるほど」

声いつもの調子が戻った。けれど、それが空

元気だということが、僕にはよくわかってしまう。

別に移住する人は珍しくない。地底の資源は有限であり、いつかは底をつくことは最初からわかっていたことだったらしい。それでも地底での生活を選んだのは、まだこの星に対する執着があるのか、宇宙に対する恐れなのか。いつかは、誰もがこの星を手放さなければならないのに。

「私さ、日焼けってちょっと懂れてたんだ。ほら、地下にいたら絶対出来ないでしょ？」

「宇宙に出たって出来ないと思うけど」

「そうかなー。太陽が見えるんだから出来るんじゃないの？」

「紫外線が届かなきゃ意味無いよ。でも、本物の太陽は見てみたいな」

偽物じゃなくて本物を、この目で見たい。

地下で育った僕には、それだけが少しうらやましい。

「じゃあさ、一緒に来る？居候とかいって」

彼女は笑ってそう言う。冗談めかした含みのある笑い。そう、これは、冗談だから。

「面白そうだけどね、無理だよそれ」

僕も笑ってそれに答える。冗談、冗談なんだけ  
ど、なあ。

「そっか。残念」

だんでだろう。笑顔が悲しく見える。そんなはず  
ないのに。

「あ、そう言えばどこ行くの？」

「あ、ちよつとジュースを買いに」

そっかと頷いて、僕は歩き出した。

違う世界に別れる最後の時間をなんでもない時  
間のように。

八月三十一日。

僕らが世界を変える最後の日。